

おうが

これもと

大神氏の始祖惟基を

”あかがりの大弥太“ということについて(二)

大分大学名誉教授
九州東海大学教授

富 来

隆

(大分市・志手)

三

日本の古代にあって、山ノ神、海ノ神々は、竜蛇神であつた。天皇家をはじめ有力氏族たちも多くは竜蛇神の子孫とされた。それらのなかで、住吉系のナガ(ナガラ)神、宗像系のトビ(トベ)神、八幡系のヤアタ神などは世上にひろく知られており、のちには天皇氏族を中心として多くがトビ神に変わっていくことになる。

— 佐伯地方の尾長良権現(ナガラ)、小半洞(オナガラ)なども、ナガラ(蛇神)が念頭におかれている

わが大神(緒方)氏もまたその例にもれないのである。そして古代海人族の名残りがつよく、トビ・ヤアタなど

の神々もひろく活動のあとが見られることは、すでに幾たびか論じた(例えば小著『卑弥呼』など)。

大神氏一族が占拠・活動したところに、トビの地名が多く存すること、トビ・トビノオ等の竜蛇神や憑きもの神の存することも、古代日本の近畿を主として瀬戸内沿岸の社会(記・紀のなかにも見える)と同様である。ヤアタが出雲においてヤマタのオロチとなり、宇佐においてヤワタ(八幡)の神となったことも著しい。『豊後風土記』には直入郡に「打猿(うちざる)八田(やあた)、国麻呂」の三人の名が見えること、これをどう解すべきかについても、すでに述べたことがある(「大分県地方史」42年10月号)。

このような社会的風土のうえに、わが緒方(大神)氏

の竜蛇神と結びつく伝承がみられるのは、何ら異とするに当らない。ただ『平家物語』と『源平盛衰記』とに多少の差異があることには注目しなければなるまい。以下、これについて少しく記していく。

(1) まずは、「かの維義は怖しきもの末なりけり。

たとへば豊後の国の片山里に、昔、女ありけり。或人の一人娘、……」（平家）

「かの維義と云うは、大蛇の末なりければ……、昔、日向の国の塩田と云う所に、大太夫と云う徳人あり、一人の娘あり、その名を花ノ御本と云う」（盛衰記）

「平家」には豊後の片山里とあり、また或人の一人娘と記すにとどまるのに対し、「盛衰記」には日向の塩田に大太夫と云う徳人あり、娘の名を花ノ御本と云う、と見えて、相当な隔りがある。日向の塩田とは、今の延岡市の海岸部で、五箇瀬川の河口の地にあたるものと思われる（『太宰管内志』）。

のちの大神氏一族の占拠地点ということから考えると、なぜ日向の塩田になったのか、疑問がのこる。やはり、「平家」の方を探るべきだろうか。

なお、『参考源平盛衰記』によれば、このところ、「長門本に云、豊後国知田村と云所に、赤雁太夫と云者の娘あり、柏原御許とそ云ける」とあり、また「南都本に云、豊後国伊智田村と云、片山里に大太夫と云者、一人の娘あり、柏原のおうととそ云ける」などともある。いろいろの伝えがあつて混乱しているさまが窺われる。ことに後に述べる「あかがりの大弥太」（大神ノ惟基）の呼び名の「あかがり」が、娘の父親に「赤雁太夫」として見られることは面白い。

(2) 次いで、「夫も無かりけるが許へ、母にも知らせず、男、夜な夜な通うほどに、年月も重なるほどに、身も只ならず成りぬ」（平家）

「いづくより来るとも覚えず、立烏帽子に水色の狩衣きたる男の、廿四五なるが田舎の者とも覚えず、たおやかなる貌にて、花ノ御本を傍に指寄せて、……、男、夜な夜な通ひ、……、父母につつみて深くこれを隠しけれども、夜々のことなれば、附仕ける女童これを見咎めて、父母に角とぞ語りける」（盛衰記）

(3) それにつづけて、これからが本番である。

「母これを怪しんで、汝がもとへ通う者は何者ぞと問へば、来るをば見れども帰るをば知らずとぞいひける。

さらば男の帰らんとし、験(しるし)を附けて行かむ方をつないで見よと教えければ、娘、母の教えに従いて、朝帰りする男の……狩衣のくびがみに針をさし、賤の小田巻というものをつけて、行方をつなげば、豊後と日向境の、姥嶽(うばだけ)という嵩(たけ)のすそ、大いなる岩屋の中へぞ繫ぎ入りたる」(平家)。

「母が云、その人夕に来て暁に帰るなるに、しるしをさして、その行末を尋ぬべしとて、苧玉卷(おだまき)と針とを与えて、懇ろに娘に教えて、後園の家に帰す、……教の如く、女、針を小手巻の端に貫て、男の頸かみに指してけり、夜明けて後に角と告げれば、親の塩田大夫、子息家人四五十人引具して、糸のしるしを尋ね行き、……日向と豊後との境なる嫗嶽(うばだけ)と云う山に、大なる窟の中へぞ引入れたる」(盛衰記)。

さて、この条、よく知られているように『古事記』の崇神天皇の御代に、次のような記事が見える。

「活玉依姫(いくたまより)のところを夜半に訪れる男子があり、姫が姫

娠し、父母に問われてもその名前がわからない。母が教えて、^レ赤土を床前にちらし、^レへソ緒を針に貫いて、その衣のすそにさせ^レと。その朝、糸のまにまに尋ねて行ったところ、三輪山に至って神社に留まったので、その男子がじつは三輪山の大蛇神だと知った」、(古事記)というのである——それゆえ、大神をオオミワとよむ——。

豊後の大神ノ惟基の神婚譚のこのところの表現は、右の物語とまったく同型である。これをまねしたものである。だからと言ってこの物語そのものが、古事記のまねごとだとするのは行きすぎであろう。もともと豊後水道域からセト内沿岸、近畿にかけての地方は、前にも記したように古来から竜蛇神の活動した舞台である。そのことがあって、このような「古事記」の表現を借りたのにちがいない。

この「古事記」の表現のマネの部分(このところ)を重要視することが、その系図にも作出されて、大神(おうが)の氏姓を三輪ノ神の大神(おうみわ)と同一視するに至ったのもあろうと思われる。しかし、此所の表現自体には、それほど重要性をもたせるべきではなく、むしろ問題は、これから先(4)、(5)のところにこそ存

するのである。大神ノ惟基は、あくまでも祖母岳大神の申し子でなければならぬ。豊後の南半分と日向の北辺に蕃居するこの一大氏族（海人族であり、鍛冶の業にも従っていた）を、祖母岳の大神の児孫としてそのカリスマ性を説明しようとする(4)が、この物語の本意だともう。

(4) 「女、岩屋にたたずんで聞けば、大きな声してぞよびける。わらわこそ是まで尋ね参たれ、見参せむ、と云いければ、我は是れ、人の姿にはあらず、汝、我が姿を見ては肝魂も身に副うまじき也、とうとう帰れ、汝が孕める子は、男子なるべし、九州二島にならぶ者もあるまじきぞ、といひける。

女、重ねて申しけるは、たとい如何なる姿にても有れ、日ごろの好みなどか忘るべき、互に姿を見もし、見えむ、といわれて、さらばとて、岩屋の中より、卧長は五六尺、跡枕べは十四五丈も有らんと覚ゆる大蛇にて、動揺してこそ這出たれ。」（平家）。

「父が教に依て、娘、穴口にて糸を引へて云いけるは抑も此の穴の底には如何なる者の侍れるぞ、また何事を

痛んで吟くぞ、と問えば、穴の中に答けるは、汝花ノ御本が許へ、夜な夜な通いつる者なり、……我れ本身は大蛇なり、有し形ならば出でて見もし見え奉り度くこそあれ共、日ごろの變化既に尽きぬ、……。

女の云う、たとい如何なる貌にてましますとも、日ごろの情いかでか忘るべきなれば、只出で給へ、最後の有様をも見、また見えもし奉らん、つゆ恐しと思わずと云いければ、大蛇は穴の中より匍い出でたり。

長さは知らず、卧長は五尺許りなり、眼は、胸の鈴を張るがごとく、口は紅を含めるに似たり、頭に角を戴き、耳を低くたり、頭は髪生えなどして、獅子の頭に異ならず、

されども形には似ず、おめおめとして涙を浮べて、頭ばかりを指し出したり、女、衣を脱で蛇の頭に打懸けて、自ら頤の下の針を抜く。大蛇、悦びて申しけるは、汝が腹の内に一人の男子宿せり、己に五月に成る、もし十月にして顕われたらば、日本国の大将とも成るべかりしども、五月にして顕れぬ、九国には双ぶ者あるまじ、弓矢を取りて人に勝れ、謀賢くして心剛なるべし、斯る怖しき者の種子なればとて、穴賢捨て給うな、我れ子孫の末

までも守護すべし、必らず繁昌すべし。是を最後の詞にて、大蛇、穴に引入て死にけり、彼の大蛇と云うは、即ちうばだけ 嬭嶽の明神の垂迹なり」(盛衰記)

大蛇の申したる言葉に、とくに傍線をつけたのは他でもない。これこそ嬭嶽大明神(大蛇神)の「予言的神託」だからである。まさにこのことが、大神ノ惟基をしてカリスマたらしめる所以を明らかに示している。

日本の社会のような「伝統性」のつよいところでは、その秩序をかえ新しく創造するについて、とくに偉大な指導者の存在を必要とする。宗教界はもとより、政治にあつても、軍事にあつても、すべて「超人的な能力」の持ち主として仰がれるような英雄(カリスマ)を必要とする。

それが神から生まれた貴種であれば尚更である。かの日輪の光に感応して生れたという貴子誕生譚や、また蒙古での、月夜に窓から訪れた蒼き狼あおおおかの児孫とする物語り(成吉思汗)。これらはすべて「神秘なる出生」譚によるカリスマ的超人たるに他ならぬ。

マックス・ウェーバーは、カリスマについて次のように説明している。

「カリスマ的支配は、この人のもつ天与の資質(カリスマ)、とりわけ呪的能力・啓示や英雄性などへの情緒的な帰依によって成立するといふ。最も純粹な型は、予言者・軍事的英雄、偉大なデマゴーグの支配である。支配団体は宗団または従士団の形をとる情緒的な共同体であるとされる。それは指導者と帰依者との間柄である。伝統的な社会を、その秩序をあたらしく意識的に創造することは、原始的にはつねに「予言的神託」であつたか、またはそれに近い「神聖なもの」とされたのであり、そのさい服従といふことは、予言者(指導者)の正統性を信ずる随順にあつた。」(『支配の社会学』より)

この点からみて、嬭嶽の大蛇神の「申し子」たること、それだけで十分であるのにさらに、「九国に並ぶ者なき」すぐれた者だとの予言的神託をうけた申し子なのである。まさにカリスマ出現の典型(イデア、タイプス)と云えよう。

(5) そして、この惟基の通称がすばらしい。すなわち「大蛇神の子だ」と言う名前なのである。すなわち、

「女、歸りて程なく産をしたりければ、男にてぞ有りける。母方の祖父太夫、生立て見むとて生立てたれば、未だ十歳にも満たざるに、背大に顔長く、長高かりけり、七歳にて元服せさせ、母方の祖父を大太夫という間、是をば大太とこそ附けたりけれ。夏も冬も、手足に大きな胝（あかがり）隙なくわれければ、胝ノ大太とこそいはれけれ。」（平家）

「花ノ御本、男子を生む、成長するに随つて、容顔もゆゆしく心様も猛かりけり、母方の祖父が名を取りて、是を大太童と呼ぶ、跣脚にて野山を走り行きければ、足には靴（あかぎれ）つねにわれけり、異名には靴童（また、赤雁ノ大太）とも云いけり。此の童は、烏帽子着けて、靴ノ大弥太と云う。（盛衰記）

こうして『平家物語』、『源平盛衰記』に、大神氏一族の始祖たる惟基の神秘な出生を説いている。それだけではない。彼の通称にそのことを示している。すなわち、
「あかがりの大弥太」と呼ぶのがそれである。

「弥太」が「ヤアタ」の謂であつて、その宛て字であることは言うまでもない。「八田」と同じであり、大弥太というからには、それがヤアタ（ヤアタロ）の巨大な

もの、大蛇だということである（長さ十四、五丈とある）。ヤアタの宛て字には、八田、弥太などの他にも矢畑、矢田、矢羽田、矢幡、八幡なども見られる。

大和（奈良）で「ミイ様」・「ミワ」（三井、三輪）などと呼ぶのとは異なつて、ヤアタこそ当地域での古くからの呼称である。それが次第にトビ（トベ）、トビノオに統一されたことは前に述べた。この点からしても、大神ノ惟基の呼び名を「大弥太」としたのは、むしろ古い形を示したものと言ふことができる。

さて次に、「あかがり」の意味のことがある。カリが古代朝鮮語で 칼리（銅）であり、それが転じて、いまのカネ（金属）の意味になつた。カネ（金）が全金属を表わすに至つたのも同じである。くわしくは拙著『卑弥呼』にも記したとうりである。

とにかく始原的には、カリとは銅の義であり、アカガリとは赤銅のことにちがいない。遠賀川域の香原銅山のイカリ、マガリカネの地名、神功皇后の伝説に対して、大分川河口にはイカリ山、マガリの地名、神武天皇の伝説がある。佐伯には狩生（カリウ）がある。

そこで先ほどの巨大な蛇神の「眼は銅の鈴を張るがど

とく、口は紅を含むに似たり」（盛衰記）という一文を
想い出してみる必要がある。銅の鈴を張ったような大き
な眼が、赤銅色にららんと光っていた、というのであ
る。「あかがり」とは「赤銅」のこと、「あかがりの大
弥太」とは「赤銅色に光りかがやく眼をした大蛇神」その
ものをさしているのである。

それでは「アカギレ」とはどういうことなのか。「ア
カガリ」に赤雁ならばいざ知らず、厖の字をあてたこと
から「アカギレ」となり、さらに駈の字と変って、その
ことから「夏も冬もアカギレにわれていた」などの苦し
い説明となってしまうのである。

納得して頂くために、恰好な一例を示してみよう。

日田市の東北端（玖珠町と山国町との境界）に、一尺
八寸山（みおう山707m）がある。「ミオウ（ミオ）」と
は漑、水尾のことである。ではなぜ「一尺八寸」と書い
て「ミオ」とよむのか。正解は次のごとくである。

西鶴の『日本永代蔵』に、「日和見乗り覚て、西国の
菅尺八寸といへる雲行も……」とある。一尺八寸とは笠
の寸法で（平たい三角形をした、頭にかぶる笠で、長さ
が丁度一尺八寸ある）、この笠の形に似た雲、すなわち

笠雲のことである。

「山が笠をかぶると、雨がふる」といわれる、その山
をさして一尺八寸山と名付け、ミオ山とよぶというわけ
である。

ところが、そのミオに「水尾」ならぬ「三尾」の字を
あてたことから、あたらしい伝説が生まれた。「昔、こ
の山に怪物がいて……猪のような怪物で、三本の尾をも
っていた。尾の長さはどれも一尺八寸。そして三尾だか
らミオとよぶ」また異伝があり、「三本の尾を合わせて
一尺八寸とか、また三匹の尾を合わせて一尺八寸、とい
う話もある」。（梅木秀徳著『大分の伝説』下）

「ミオ」に「三尾」の字をあてたこと、それからこの
ような怪物の伝説が生まれた。全く、やれやれである。
こういうような例は、幾つもあるのである。

「あかがりの大弥太」に、「厖」の字を用いたことか
ら、厖（あかがり、とも、あかぎれとも読む）から更に
駈（あかぎれ）となり、「アカギレの弥太さん」という
説明が生まれた。しかし、これではどうしようもない。

これではカリスマ的英雄たる始祖伝説には全くふさわ
しくないこと、もはや言うをまたない。

「らんらんと光る赤銅色の眼をした大蛇神」（の申し子）という呼び名こそが、大神（おうが）ノ惟基の出生譚として相応しいと知るべきである。

正解は、右のごとし。いかにもカリスマらしい気分が直接に漂ってくるではないか。本稿の表題とした所以でもある。

以上で本論を終ってよいのであるが、それだけではない。お一本シンが通っていない。なぜに竜蛇神が出現するか、の説明には半分しか答えていない。いま少しがまんして、私の所論をつづけさせて頂きたい。

結論から言えば、緒方氏を宗とした大神氏一族は、おそらく銅・鉄・水銀（朱）などの金属技術をもった工人たち、すなわち、採鉱・冶金にたずさわる古代海人族たちの伝統を根強くもちつづけ、さらにそれを展開した技術集団であった、と主張したのである。

竜蛇神をまつる三輪山に、三輪神社の北隣りに、狭井（サイ）神があり、（サイとはサビ、砂鉄のこと）神武天皇の后妃および妹君をまつる。ともに、その名前に「タラ」のつく姫たちである。宇佐八幡神の出現には「鍛冶ノ翁」の貌をとったことはすでに知られるところ。そ

して祖母山から東方への、豊・日境界の山々には、すこぶる豊富な（銅その他の）鉱山がつづく。また海岸部には入津とか大入島などの「入」すなわちニウ（丹生）の地名があり、城山の南麓にはその採鉱址も知られている。また製鉄の址ものこる。伝承・また一族たちの業務のなかにこれを証するものがある。これを念頭において議論をすすめる。

(6) 「源平盛衰記」には、惟義の出生を次のように記している。

「大弥太が子に大弥次、其の子に大六、其の子に大七、其の子に尾形三郎惟義なれば、大六より五代の孫なり、心も猛く畏しき者にてぞありける。此の惟義には兄弟三人有りけるが、次郎は死す。太郎は名生、三郎は尾形と云う。二人が中に、此の三郎は蛇の子の末を継ぐべき驗（しるし）にやありけん、後に身に蛇の尾の形と鱗の有りければ、尾形ノ三郎と云う。」（盛衰記）

惟義の身体（お尻に）に、「蛇の尾の形とウロコ」とがあった。これこそ惟義が惟基の末孫として、竜蛇神の申し子の再来（カリスマ）だ、と主張するのである。

さて、「この惟義には三人の兄弟あり、次郎は死す、太郎は名生、三郎は尾形と云う」と見えるその、太郎と三郎の姓のことである。

「尾形」については「蛇の尾の形と鱗のしるし」が身体に見えた、ということの説明してある。まがりなりに理窟をつけたわけであるが、金関丈夫教授の言うように胸形（宗像とか宗方とか記されている）と対比して、尾形（緒方）とは、身体の一部（お尻）に「文身いれずる」している古代海人族の風習の残存の呼称ではないか『発掘から推理する』、と考えられるのである。胸形が宗像の字に変わったように、尾形が緒方に変ったことも十分に推察される。そして日形とか月形などの呼称も、それが「文身」の形を現わしたものとして考えられるだろう。

『源平盛衰記』の一文は、無理なこじつけであったものと思われるが、じつは皮肉にも、半分その真実を語ることになったのである。——豊後では「緒方」（地名も姓も）、肥後では「尾形」となっている——。

問題は太郎の姓の「名生」である。このような地名は当地付近には見当らない。また大神氏の諸系図にも一向に見られない。系図によれば、兄の名は「惟隆」として

その註に「臼杵大夫」とか「臼杵太郎」とか見えるのである——名生の地名としては宮城県古川市のなかに「名生館」として「みようだて」と読むところがある。だから名生はミヨウとよむことにしておく——。

「名生」がどうして「臼杵」になるであろうか。転写のあいだに間違えたとしても、こうはなるまい。私としては「名生」の「名」と云う字が、草書体の「丹」字を転写するさいに、「丹」が「名」となったのではなからうかと考えた。「丹生」（にう）ならば意味が通ずるのである。丹生郷のうちに、臼杵荘がうまれるのであってみれば、盛衰記の間違いも、盛衰記と系図との相違も、よく納得がいく。

おそらく「太郎名生」とは間違いで、「太郎丹生」とあったのが、その本来のものではあるまいか。

すこしく脱線したが、私としては、大神氏は、「鍛冶」の業に従事した海人衆の一族ではなからうかと考えている。そして、水銀朱（ニウ）、銅（カリ）、鉄（サイ、ウタ）などの採鉱・冶金に従っていた一族であり、そうとすれば、「火と風と」を神として祀る氏族でもあり（祖母山の風祭り）、農民からは怖れられ、敬われ、そ

のうえ（古くから）蛇神と結びついていることになる——花ノ本姫のところに通ったとされるが、その社祠が「宇田枝」にある（この洞の水は強い鉄分である）ことも、右のような事情なればこそと首肯される——。

このことを詳述するには、さらに紙数を費さねばならないが、そう考えることで、佐伯地方（南海部の地域）と緒方ノ惟栄と大神ノ惟基との結び付きが了解され、大神ノ惟基および惟栄のカリスマ性もまたスムーズに説明がつくのである。

〔あとがき〕

——熊野の神を一名「鑄師明神」とよび、鍛冶屋の祀る神なること（『神道集』）、また「一ツ目の神」が鍛冶ノ神であること（佐伯では稲垣大内の黒塚神社）も、上述の問題と関連する。要するに採鉱・冶金の術が古来「海人族」たちの職業でもあった、ということである。そのことについては、簡単ながら大分大学教育学部『豊後水道域』（昭五五年三月刊）の「緒論」にも述べておいた。本書は沿岸の各地教委、学校、図書館などに寄贈してあるので、ついて参看されれば幸いである。——

追記

——昭五七、一、五一——
羽柴先生から「佐伯史談会」の講演にお招きをうけながら、果せなかったお詫びもこめて、この一文を先生の御霊前に捧げます。

生前の御厚情を謝し、つつしんで御冥福を御祈り申し上げます。

会員の出版紹介

弥生の今昔

編集者 古藤田 太

A5判 九十二頁

明治十年西南役に従軍、戦死した町出身の鎮台兵の写真や、明治四十一年の戊申溜池の大工事の様子を語る写真など、古い写真や新しい写真が、簡潔な説明で、ある時は編年体で、ある時は項目別に、良質な用紙に、大型判で、弥生町の変遷をわかり易く説明している。

まことに楽しい写真集である。

明治百年を記念する学校毎の写真集は見かけるが、町村が刊行した「今昔の写真集」は珍らしい。編集者の御苦労に敬意を表したい。（弥生町老人クラブ連合会刊）